

虔十公園林

宮沢賢治

青空文庫

度十はいつも縄なわの帯をしめてわらって杜もりの中や畑の間をゆっくりあるいているのでした。雨の中の青い藪やぶを見てはよろこんで目をパチパチさせ青ぞらをどこまでも翔かけて行く鷹たかを見付けてははねあがって手をたたいてみんなに知らせました。

けれどもあんまり子供らが度十をばかにして笑うものですから度十はだんだん笑わないふりをするようになりました。

風がどうと吹ふいてぶなの葉がチラチラ光るときなどは度十はもううれしくてうれしくてひとりでに笑えて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのぶなの木を見上げて立っているのです。

時にはその大きくあいた口の横わきをさも痒かゆいようなふりをして指でこすりながらはあはあ息だけで笑いました。

なるほど遠くから見ると度十は口の横わきを搔かいているか或あるいは欠伸あくびでもしているかのように見えました。が近くではもちろん笑っている息の音も聞えませんでした。唇くちびるがピクピク動いているのもわかりました。から子供らはやっぱりそれもばかにして笑いました。

おつかさんに云いいつけられると度十は水を五百杯ばいでも汲くみました。一日一杯畑の草もと

りました。けれども度十のおつかさんもおとうさんも仲々そんなことを度十に云いつけようとはしませんでした。

さて、度十の家のうしろに丁度大きな運動場ぐらいの野原がまだ畑にならないで残っていました。

ある年、山がまだ雪でまっ白く野原には新らしい草も芽を出さない時、度十はいきなり田打ちをしていた家の人達たちの前に走って来て云いました。

「お母が、おらさ杉すぎ苗なえ七百本、買って呉けろ。」

度十のおつかさんはきらきらの三本さんほん鋤くわを動かすのをやめてじっと度十の顔を見て云いました。

「杉苗七百ど、どごさ植えらい。」

「家のうしろの野原さ。」

そのとき度十の兄さんが云いました。

「度十、あそこは杉植えでも成長おがらない処ところだ。それより少し田でも打って助すけろ。」

度十はきまり悪そうにもじもじして下を向いてしまいました。

すると度十のお父さんが向うで汗あせを拭ふきながらからだを延ばして

「買ってやれ、買ってやれ。度十あ今まで何一つだて頼んだごとあ無いがったもの。買ってやれ。」と云いましたので度十のお母さんも安心したように笑いました。

度十はまるでよろこんですぐにまつすぐに家の方へ走りました。

そして納屋なやから唐鋤とうくわを持ち出してほくりほくりと芝しばを起して杉苗を植える穴を掘ほりはじめました。

度十の兄さんがあとを追って来てそれを見て云いました。

「度十けんじゅう、杉あ植える時、掘らないばわがないんだじや。明日まで待て。おれ、苗買って来てやるがら。」

度十はきまり悪そうに鋤を置きました。

次の日、空はよく晴れて山の雪はまっ白に光りひばりは高く高くのぼってチーチクチーチクやりました。そして度十はまるでこらえ切れないようににこにこ笑って兄さんに教えられたように今度は北の方さかいの塚つかから杉苗の穴を掘りはじめました。実にまつすぐに実かに間かん隔かん正しくそれを掘ったのでした。度十の兄さんがそこへ一本ずつ苗を植えて行きました。その時野原の北側に畑かたを有もっている平二がきせるをくわえてふところ手をして寒そうに肩かたをすぼめてやって来ました。平二は百ひやく姓しょうも少しはしていましたが実はもつと別の、

人にいやがられるようなことも仕事にしていました。平二は度十に云いました。

「やい。度十、此処ここさ杉植えるなんてやつぱり馬鹿ばかだな。第一おらの畑ひかげあ日影ひかげにならな。」

度十は顔を赤くして何か云いたそうにしましたが云えないでもじもじしました。すると度十の兄さんが、

「平二さん、お早うがす。」と云つて向うに立ちあがりましたので平二はぶつぶつ云いながら又またのつそりと向うへ行つてしまいました。

その芝原へ杉を植えることを嘲笑わらつたものは決して平二だけではありませんでした。あんな処に杉など育つものでもない、底は硬かたい粘土ねんどなんだ、やつぱり馬鹿は馬鹿だとみんなが云つて居おりました。

それは全くその通りでした。杉は五年までは緑いろの心しんがまつすぐに空の方へ延びて行きました。がもうそれからはだんだん頭が円く變つて七年目も八年目もやつぱり丈たけが九尺ぐらいでした。

ある朝度十が林の前に立っていますとひとりの百姓じやうだんが冗談じやうだんに云いました。

「おおい、度十。あの杉あ枝打えだうぢささないのか。」

「枝打ちていうのは何だい。」

「枝打ちつのは下の方の枝山刀で落すのさ。」

「おらも枝打ちするべがな。」

度十は走って行つて山刀を持って来ました。

そして片っぱしからぱちぱち杉の下枝を払いはじめました。ところがただ九尺の杉ですから度十は少しからだをまげて杉の木の下にくぐらなければなりませんでした。

夕方になつたときはどの木も上の方の枝をただ三四本ぐらいつ残してあとはすっかり払い落されていました。

濃い緑いろの枝はいちめんこに下草を埋めうその小さな林はあかるくがらんとうなつてしまいました。

度十は一ぺんにあんまりがらんとうなつたのでなんだか気持ちが悪くて胸が痛いように思いました。

そこへ丁度度十の兄さんが畑から帰つてやつて来ましたが林を見て思わず笑いました。そしてぼんやり立っている度十にきげんよく云いました。

「おう、枝集めべ、いい焚たぎものうんと出来だ。林も立派になつたな。」

そこで度十もやつと安心して兄さんと一いっしょ緒よに杉の木の下にくぐつて落した枝をすつか

り集めました。

下草はみじかくて奇麗きれいでまるで仙せん人たちが碁ごでもうつ処のように見えました。

ところが次の日度十は納屋で虫喰むしくい大豆まめを拾ひろっていましたら林の方でそれはそれは大き
わぎが聞えました。

あつちでもこつちでも号令をかける声ラツパのまね、足ぶみの音それからまるでそこら
中の鳥も飛びあがるようなどつと起るわらい声、度十はびっくりしてそつちへ行つて見ま
した。

すると愕おどろいたことは学校帰りの子供らが五十人も集つて一列になつて歩調をそろえて
その杉の木の間を行進しんしているのです。

全く杉の列はどこを通つても並木道なみきみちのようでした。それに青い服を着たような杉の木
の方も列を組んであるように見えるのですから子供らのよろこび加減と云つたら
とてもありません、みんな顔をまつ赤にしてもずのように叫さけんで杉の列の間を歩いている
のです。

その杉の列には、東京街かいどう道どう口シヤ街道それから西洋街道というようにずんずん名前が
ついて行きました。

度十もよろこんで杉のこつちにかくれながら口を大きくあいてはあはあ笑いしました。それからはもう毎日毎日子供らが集まりました。

ただ子供らの来ないのは雨の日でした。

その日はまっ白なやわらかな空からあめのさらさらと降る中で度十がただ一人からだ中ずぶぬれになって林の外に立っていました。

「度十さん。今日も林の立番だなす。」

蓑みのを着て通りかかる人が笑って云いました。その杉には鳶とびいろ色の実がなり立派な緑の枝さきからはすきとおったつめたい雨のしずくがポタリポタリと垂れました。度十は口を大きくあけてはあはあ息をつきからだから雨の中には湯気を立てながらいつまでもいつまでもそこに立っているのです。

ところがある霧きりのふかい朝でした。

度十は萱場かやばで平二といきなり行き会いました。

平二はまわりをよく見まわしてからまるで狼おおかみのようないやな顔をしてどなりました。

「度十、貴きさんどこの杉き伐れ。」

「何なしてな。」

「おらの畑あ日かげにならな。」

度十はだまって下を向きましました。平二の畑が日かげになると云ったって杉の影がたかで五寸もはいってはいなかつたのです。おまけに杉はとにかく南から来る強い風を防いでいるのでした。

「伐れ、伐れ。伐らないが。」

「伐らない。」度十が顔をあげて少し怖こわそうに云いました。その唇くちびるはいまにも泣き出しそうにひきつっていました。実にこれが度十の一生の間のたった一つの人に対する逆らいの言ことばだつたのです。

ところが平二は人のいい度十などにばかにされたと思つたので急に怒おこり出して肩を張つたと思うといきなり度十の頬ほおをなぐりつけました。どしりどしりとなぐりつけました。

度十は手を頬にあてながら黙だまつてなぐられていました。がとうとうまわりがみんなまつ青に見えてよろよろしてしまいました。すると平二も少し気味が悪くなつたと見えて急いで腕うでを組んでのしりのしりと霧の中へ歩いて行ってしまいました。

さて度十はその秋チブスにかかつて死にました。平二も丁度その十日ばかり前にやつぱりその病気で死んでいました。

ところがそんなことには一向構わず林にはやはり毎日毎日子供らが集まりました。
お話はずんずん急ぎます。

次の年その村に鉄道が通り度十の家から三町ばかり東の方に停車場ができました。あちこちに大きな瀬戸物の工場や製糸場ができました。そこらの畑や田はずんずん潰れて家たちました。いつかすつかり町になってしまったのです。その中に度十の林だけはとう云うわけかそのまま残つて居りました。その杉もやつと一丈ぐらい、子供らは毎日毎日集まりました。学校がすぐ近くに建つていましたから子供らはその林と林の南の芝原をいよいよ自分らの運動場の続きと思つてしまいました。

度十のお父さんももうかみがまつ白でした。まつ白な筈です。度十が死んでから二十年近くなるではありませんか。

ある日昔むかしのその村から出て今アメリカのある大学の教授になつてゐる若い博士が十五年ぶりで故郷へ歸つて来ました。

どこに昔の畑や森のおもかげがあつたでしょう。町の人たちも大ていは新らしく外から来た人たちでした。

それでもある日博士は小学校から頼まれてその講堂でみんなに向うの国の話をしました。

お話がすんでから博士は校長さんたちと運動場に出てそれからあの度十の林の方へ行きました。

すると若い博士は愕おどろいて何べんも眼鏡めがねを直していましたがとうとう半分ひとりごとのように云いました。

「ああ、ここはすっかりもとの通りだ。木まですっかりもとの通りだ。木は却かえって小さくなったようだ。みんなも遊んでいる。ああ、あの中に私や私の昔の友達が居ないだろうか。」

博士は俄にわかに気がついたように笑い顔になって校長さんに云いました。

「ここは今は学校の運動場ですか。」

「いいえ。ここはこの向うの家の地面なのですが家の人たちが一向かまわなで子供らが集まるままにして置くものですから、まるで学校の附属ふぞくの運動場のようになってしまうましたが実はそうではありません。」

「それは不思議な方ですね、一体どう云うわけでしょう。」

「ここが町になってからみんなで売れ売れと申したそうですが年よりの方がここは度十のただ一つのかたみだからいくら困つても、これをなくすることはどうしてもできないと答

えるそうです。」

「ああそうそう、ありました、ありました。その度十という人は少し足りないと思つていたのです。いつでもはあはあ笑つている人でした。毎日丁度この辺に立つて私らの遊ぶのを見ていたのです。この杉もみんなその人が植えたのだそうです。ああ全くたれがかしくたれが賢くないかはわかりません。ただどこまでも十力の作用は不思議です。ここはもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでしょう。ここに度十公園と名をつけていつまでもこの通り保存するようにしては。」

「これは全くお考えつきです。そうなれば子供らもどんなにしあわせか知れません。」
 さてみんなその通りになりました。

芝生のまん中、子供らの林の前に

「度十公園」と彫つた青い橄欖岩の碑が建ちました。

昔のその学校の生徒、今はもう立派な検事になつたり将校になつたり海の向うに小さいながら農園を有つたりしている人たちから沢山の手紙やお金が学校に集まって来しました。度十のうちの人たちはほんとうによるこんで泣きました。

全く全くこの公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすずしい陰、月光色の芝

生がこれから何千人の人たちに本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした。
そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき徹る冷たい雫をみじかい草にポタリポタリと落しお日さまが輝いては新らしい奇麗な空気をさわやかにほき出すのでした。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年10月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

度十公園林

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>